

# 南方（ボルネオ）

南十字星の下に

眠る戦友を祈る

愛知県 松村文八

私の生まれた所は、長野県の最南端の売木村です。その後、豊橋の現住所に移住しました。両親の許に六人の兄弟姉妹で、私は次男で弟は二人、姉二人の八人家族でした。末弟が罹病して十二歳で他界しました。村はすべて農林業でした。大正から昭和の初期の大恐慌で、貧富の差はますます激しき中、僅か一握りの人間が裕福な生活をし、国民の大多数が生きて行くのに、精いっぱいの時

代でした。でも近隣の人達は人情味豊かで、山紫水明の山里で、近くを流れる小川は、峯や山、そして谷から谷へと合流し、あの一滴滴が合流して、末は名高き天竜川の大河になります。

兄は家業を受け継ぐべく、親父に付いて農林業をやっていました。姉二人は学校卒業後、豊橋の製糸工場に働きに行き、皆真面目に親孝行で、兄弟も仲睦まじく、笑いの絶えぬ幸福な子供時代でした。私も高等科二年終了後の昭和十二（一九三七）年春四月、名古屋市中区の鉄工所に見習工員として（住み込み）働きました。呼び名は「丁稚小僧・使い走り」でした。

起床五時三十分、工場内清掃、機械の油差しで始まり、六時三十分朝食、七時三十分、作業始

めのサイレンが工場内に響く。そして昼食、夕食後も職人さんたちは残業していたこともありました。

休日は毎月一日と十五日の二回で、その時に小遣いとして五十銭頂戴しました。社長さんの取り計らいで、愛知県立工業青年学校（夜間部）に通学させて頂き、勉学に励みました。夕方五時に作業終了で、学校に一目散に走って登校し、三、四時間程の勉強でした。急いで帰宅し、九時半頃に夕食・入浴と、毎日来る日も来る日も頑張っていました。社長さんのお陰でした。

ある時、学校の掲示板にポスターがあり、「陸軍兵器学校生徒募集」とあり、教官に相談しました。

教官は「町工場で働くのも良いが、君も現代の世情から見れば当然、徴兵検査で軍隊に行くだろう。その時は兵器学校卒業者は特待で優遇されるぞ」との言葉に励まされ、社長の許可を頂戴して受験しました。

駄目元との考えでしたが、見事に合格です。

昭和十六年六月一日、入校許可の辞令が届きました。一番に社長さんに報告してお許しを頂き、先輩や同僚にも祝福され、学校の教官には激励されました。両親には手紙で連絡しまして、入校の日まで会社にお礼奉公しました。皆さんに祝福されて学校に行くのだと思っただけで緊張しました。

いよいよ神奈川県淵の辺・陸軍兵器学校工科生徒です。これから二年五カ月です。勿論、このために昭和十七年秋に町役場から兵事係の方が来宅して、両親に「文八さんは徴兵検査免除です。陸軍学生で、特別志願扱いになっています」でした。

学校は兵器技術訓練教育以前に兵科全般、特に基本は歩兵訓練に力を入れ、教科・教本をはじめ典範令を一応軍人としての基礎教育を充分、五体に叩き込まれました。

兵器（機）技術教育も、火器学科が第一番でした。小は十四年式拳銃に始まり、三八式歩兵（騎兵）銃、軽・重機関銃、山砲、大隊砲、高射砲、野砲から曲射・臼・要塞砲と分類すると本当に多くの火器があり、その作戦と戦場において不可欠なることを知らされました。と同時に闘志が沸き起りました。またこれら火器に必要とされる銃弾・砲弾、そして火薬類にも種々あり、これらの勉強は非常に大変でした。

この頃、独逸とソビエト連邦（ロシア）が激突して、日本も満州の関東軍の充実に力を入れていました。そのために我が校からも、各兵站基地の弾薬補給廠に行動命令がありました。自分たち学生も名古屋の補給廠へ出張しました。市内の学校は夏季休暇です。その休暇の体育館を使用して「砲弾の薬きょう」に火薬を充填する作業を行うのです。このような危険なことを民間の学校で行わせていたことは、今思っても背筋が寒くなるようなことでした。約四十日間、民宿させて頂き、

この丸秘の作業を行ったのでした。

この作業は時には昼夜連続の作業でした。中でも黄色火薬が一番苦しかった。一面に黄色の煙が立ち込め、呼吸が苦しくなりました。中には倒れて医務室に担架で運ばれた友もいました。全員が身体が黄色くなり、黄疸症状で一人死亡しました。可哀相に十八歳の青春を、と思います。御家族が遺体を引き取りに來られ、私たち全員で彼の冥福を祈りお別れしました。扱いは単なる病死とこのことでした。

任務終了で学校に戻りました。入校以来、夜間に南京虫の出現で悩まされていましたが、各区隊に数人ずつの残留警備要員がいて、彼らが私たちがいない間、徹底的に全ベッドの消毒・殺虫を行ったために「今夜からは、充分安眠できるぞ」でした。

翌日の早朝、教官より訓示があり「不在中の四十日分の教育を一挙に取り戻す。本日より猛特訓

だ」と言うことで、教練に拍車が掛かりました。

時、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争の勃発です。校内の空気にも緊張が漲りました。年末年始の休暇も半数ずつ、前期組、後期組に分かれ、しかも日数も二日か三日でした。

在校中の主な行事を振り返って想い起こしますと、寒風の吹き荒れる二月、相模川の渡河訓練、夏季の袖師海岸での遠泳演習、陸軍演習に便乗した八王子方面への民宿による秋季演習、各兵科部隊への短期入隊訓練、大山神社に登山して武運長久・行軍必勝祈願、などでした。

学業の終了と卒業も真近に迫り、各人に区隊長より任地希望を申出るようにとの話がありました。第一希望、第二希望を自分の希望で申し出るのですが、勿論「最終決定は、上層部にて決す」と言うことでした。十月初めに軍装品や軍刀の注文をすることや卒業記念写真撮影などがあり、心は浮き浮きでしたが、多忙でした。

昭和十八年十月三十日付きで「任陸軍兵技伍長・松村文八」が誕生しました。任地は第一希望の通り南方戦線でした。しかも南方総軍司令部付と決定しました。内地勤務及び任地部隊へ直行できる同期生は即日出発でした。

卒業式並びに壮行会がありました。在校生が全員二列に整列した中を歩武堂々と行進し、陸軍技術伍長の真新しき襟章も光輝き、晴々となりました。顔で校門を後にしました。

自分たち南方関係は、少し遅れるとの伝達があり、全員一泊外出が許可されました。我が家へ帰り、氏神様や先祖の靈位に武運長久を念じ、親兄弟・親戚や近隣の方々にお別れを申し上げて壮途につきました。

数日間、学校にて待機です。在校生の世話になりながら、任地のことを想像して同期生と語り合いました。週番士官から達しがあり「貴官たちは十一月六日、字品に集結せよ」でした。同期同行三十人は、区隊長以下各教官並びに諸先輩に激励

され、在校生徒が「淵ノ辺駅」まで列をなして、拳手の礼で見送ってくれ「意気正に天を衝く」の気概でした。

宇品には全国から各兵団兵科の者が集結していました。自分たちの船舶は、元病院船でした。船倉には火器、弾薬、糧秣、その他必需品が満載されていました。船室部は急造の三、四段ベッド、座するがちょうどの高さで、頭が天井にゴツンです。十三隻の輸送船団です。海軍の駆逐艦、海防艦が数隻、遠くまた近くと走って護衛してくれていました。頼もしく感じました。

自分たちの乗った船も、船首と船尾に砲座が設備してありました。暁兵団の船舶砲兵が、その任に当たっていました。一般兵科からは選出して対潜水艦と対飛行機の監視要員が甲板上に出て、空と水面を睨んでいる。自分たち若手の下士官三十人は、特に対潜・対空の監視のため、五人の六交替制で行くと船舶司令より依頼を受け、当番制で

任務につきました。

大海原の中、船はどこをどのように航行しているのか一切不明でした。港に入りました。台湾の高雄との事でした。日本内地だったら降雪を見る頃なのに、半袖のシャツ一枚で充分です。三日目にそこを出帆しました。後々恐れられた魔のバシー海峡付近にて、一隻が潜水艦からの魚雷攻撃で沈没しました。

昭和十八年十二月二日、シンガポール（昭南島）へ無事入港、上陸しました。「美しい島だ」と誰云うとなく語り、眺めていました。南方総軍司令部（威）は仏印（仏領インドシナ）サイゴンにあり、一応シンガポール司令部に行き着任の申告をしました。この時点では、同期戦友は三十人でしたが、ここからは各人それぞれ原隊の所在地へと別行動になりました。

自分の原隊は泰領のワンヤイに駐留して（タイ 緬甸 鉄道警備の任にある大塚部隊です）約半程は南

兵營（旧英軍兵營）にて次なる指示を待て、と言  
うことでした。半数の戦友たちに別れを告げ再会  
を約して別れました。自分は灘兵団よりシンガ  
ポール連絡所に迎えがきた、との知らせで、急遽  
出発しました。これで同期の全戦友は四散したこ  
とになります。

鉄道列車で北進、泰領に入り、「ノンプラドッ  
ク駅」にて下車、一泊しました。兵舎は掘つ建て  
柱に椰子の葉の囲いです。横になると木の葉の間  
から星空が眺められ、ちょっと風流だなと思いま  
した。もう三十歳を過ぎたと思えるような兵隊さ  
んが「風呂が沸いたので入って下さい」と言うの  
で「有難う」で行きますと、ドラム缶風呂で、下  
駄を履いて入るのです。熱帯地方で大空の下で  
風呂とは実に風流この上なしです。

老兵に感謝の心を告げて翌朝出発、一路車上の  
人となりました。列車の速度が落ちて停車しまし  
た。「全員下車して車両を押して下さい」と。大  
きい荷重の時は、この峠は自力で登坂できぬとの

事、初めての体験でした。

目的地の「ワンヤイ」には、その日に到着しま  
した。十二月十五日です。部隊長はじめ諸上官に  
申告し、大塚部隊の一員として働くことになりま  
した。部隊は応召兵で編成されているので老兵が  
多く、軍医さんと自分とは、他の将校・下士官と  
は別待遇で、三十過ぎの当番兵が何かにと世話を  
してくれ、かえって恐縮する次第でした。彼らは  
岡山編成の部隊で、妻子のある人多しとの事、自  
分は戦友に接する如く彼らと親しみました。

昭和十九年の新年を迎え、全員に僅かですが祝  
酒ができました。三十歳を過ぎた人生の猛者です  
「現地酒ブランデー」を入手して来て楽しくやっ  
ていました。自分に日本の現状を話してくれと頼  
まれ、夜半まで話し込んでいたら、曹長さんに怒  
鳴られました。

部隊移動のニュースが流れました。任地は「ボ  
ルネオ」との事でした。その準備に大多忙となり

ました。着任以来約一カ月、部隊所有の兵器も全部掌握できていないのに大変でした。一心不乱に火器、弾薬、その他を、台帳と照合すべく大多忙でした。

後日談、他兵団の前任兵技士官が申されました。

「貴君は若いなあ！ 第一戦（敵前）において、一つ一つ帳簿の照合するのは馬鹿のすることだ。兵隊の生命を考えて行動せよ」でした。「もつとも、道理だ」と思いました。

昭和十九年一月八日、泰国からマレー半島を南下、国境通過（昭南島）してシンガポールに到着しました。俺の軍隊って何だろう。学校卒業以来、根無し草のように絶えず移動している。今度の行く先はボルネオらしい。船便待ちで埠頭やその辺の広場にて待機してろでした。

二月になったと思う。米軍の偵察機らしき飛行機が飛来しました。以来、何日、敵機の来襲があ

るか、上層部では心配していました。日の丸の友軍機は一機だに飛来せずでした。

三月六日、シンガポール港を抜錨、南シナ海を北進、力いっぱい、敵機と敵潜水艦を特別警戒しました。船脚は遅く、甲板上では機関砲も重機関銃から三八式の歩兵銃まで、我々に向かいくる敵には「如何に螻蛄の斧と笑わば笑え、我撃ちてしまむ」の心意気でした。

北部ボルネオには三月一日に投錨。二十五日間の航海の長かったこと、全員は「ほっと、やれやれ」でサンダカンに上陸しました。自分は第三十七軍司令部（秘匿号・灘兵団）付を命ぜられました。

独立混成第五十六旅団（同・貫き兵団）、同じく独立第七十一旅団（同・敢闘兵団）等がサンダカン・西海岸のゼツセルトン、少し南のブルネイとミリに配置され、これらのボルネオ全地帯を死守するのが灘兵団の任務でした。

なお三月六日、市内の偵察を指示され、街を行

きますと、ここは昔から近隣諸国との交易が盛んだった貿易港です。街並も立派で活気が満ち溢れています。飲食店、酒場、床屋があり、果物屋には南国特有の美味なものが山と積まれています。港も大型船から小さな船まで出入りが盛んでした。

本部へ帰ると「第一、第二、第三の各中隊への電話布設が未定である。松村伍長、兵を五人連れて至急に工事に着手せよ」と命ぜられ、九二式有線電話を点検し、各中隊間の通信・通話工事に、一日位で完成しました。幹部連中が「松村は良く働く」と一応認識してくれました。

軍司令部兵器部長より「敵潜により撃沈されて、丸裸でいる部隊に対して、兵器検査を敢行せよ。員数不足、員数越加、重火器から小銃に至るまで、弾薬の保有数も併せて調査せよ」との特命が出ました。そこで自分は思ったのですが「先任者は何をしていたのか」と腹が立つより激怒して「眼前に敵影を眺めて、何たることか」と思いま

したが、現実の問題として、どのように対処すべきか、と本当に大変でした。

某所に弾薬が確保してある、といえは「松村、受領に行け」でした。すぐ旧オランダ軍捕虜（彼らのことを兵補と言う）四人を連れ、小舟に乗って行きました。自分の武器は十四年式拳銃一丁と日本刀一振りです。我も人なり彼も人なり、で任務につきましたが、全然オランダ語は知りません。彼らも日本語を知りませんが、結構意志は通じ、任務を終了しました。

この頃、敵のスパイが侵入して、日本軍の動静を調査し、現地人を煽動しているという情報が入り、一個中隊が警備の任務に着きました。夜間定時刻に狼煙が花火の如く打ち上げられています。サンダカンの街中も山奥に避難したのか人通りが少なくなり、自分たちは、こんなことではないつ敵襲に遭っても不思議ではなく当然だと思えました。



昭和十七年秋頃からアメリカ軍がフィリピン反攻のため、陸・海・空の三軍をもって猛攻撃を敢行中とのニュースが入りました。これに呼応して印度英軍・オランダ軍・濠洲軍など各国の連合軍も一大反撃に出てきました。この頃には、既に日本海軍は壊滅的な打撃を受けており、制空権は敵に奪われ、外地への弾薬、糧秣をはじめ諸物資の搬送・補給は不可能の状態でした。

肉弾をもって優勢な敵を相手に戦うのだと、全軍、誠に悲愴・悲惨な状態になることを覚悟していました。昼間は木陰に身を潜め、夜間のみしか活動できません。それでも飛行機が一機もなくとも「滑走路を完全に整備せよ」でした。敵の偵察機がこれを見て日本空軍健在と思ひ、また爆撃機が飛来して、幾百の爆弾を投下したり機銃掃射して立ち去ります。我々は夜間に応急処置でこの滑走路を整地して朝を待ちます。先日と同様偵察機に続き爆撃機が飛来し、爆弾の雨を降らせる。我々は勿論、退避壕を掘って爆撃から身を遮蔽し

ていました。

五〇〇キロの爆弾が近くに落ちると身体が宙に浮き上がり、耳の鼓膜が破れる。とにかく敵との根競べの戦いでした。自分も何度か「もう駄目だ」と思ったことです。また熱帯マラリアの三日熱に罹り、三日間意識不明の高熱に冒されました。軍医さんが特効薬を服用させて下さって命を取り止めたのですが、以後終戦により復員後、故郷に帰った後も何度か発病しました。

そうこうしているうちに転進命令で、夜陰に紛れクダツまで進み、翌日司令部の位置アビに到着しました。参謀部から各部隊の兵器の状態はどうかと問われました。自分には各部隊の所在が不明なために返答できず、嚴重注意を受けました。一兵器軍曹ごときに質問せず、参謀ならば「自分の目や足で調査せよ」と云いたかったという思いでした。

兵器学校の二期先輩・高木軍曹がゲリラと交戦

し、自動小銃の弾丸を全身に七発受けて、名誉な戦死でした。彼は満州方面からの南下部隊で、途中二回も敵潜水艦の魚雷の攻撃に遭遇し、船は沈没したが自分は助かったと、言っていたのに、このボルネオが墳墓の地となった、誠に残念でした。

この時点で、戦病死した軍人の数が多くて、戦場とはいえ、荼毘あるいは埋葬もできなかった各々霊位に対し、心よりお許しを得たいと念じております。

飛行機も双胴のロッキードやグラマン機が多く編隊で来襲し、一番機が急降下爆撃を行い、次いで二番機、三番機と上空で旋回しながら次々攻撃を加えて来ました。当初は地上より高射砲、高射機関銃で応戦しましたが、その後高高度からの確な爆弾投下となり、各陣地は木っ端みじんに粉碎されました。

各部隊は奥地に移動し、物資の補給が途絶えているから、自給自足に頼るしかなく、焼き畑農法

でタビオカ（薩摩芋）、トウモロコシ等を植え付けました。しかし、少し大きくなりますと猪が来て一夜のうちに食い荒らされてしまいました。木の若芽や野草など食えるものはすべて口に入れました。蛇も蜥蜴も美味でした。

八月十日頃だった、軍司令官が自分たちの集合小屋に激励に来て「貴君たち、健康に充分注意して、頑張れ」でした。数日後、時に昭和二十年八月十五日、夕闇迫る頃に停戦の第一報が入りました。

数日後、山を降りて海岸線の道路に出ました。武装解除でした。英軍かオランダ兵か濠洲軍か混成部隊のようでした。自分たちの腕時計や万年筆まで没収されました。翌日、収容所のような有刺鉄線で囲まれた中に天幕があり、そこで全裸になり、全身消毒されました。身体検査後、食事について申し渡され、水は一日に飯盒一杯、朝と昼の食事はビスケット十三枚で、夕食は小麦粉と少量

の米を使ったスープでした。

その後、判明したことですが、自分たちは停戦で「終戦」だと思いましたが、真実は「無条件降伏」と知らされ愕然としました。

大本営・陸軍・海軍、それに加えて参謀部は、お国のためと信じて戦線に立ち、無惨にも散華した戦友たちのことやご遺族の思いを、少しは理解しているのだろうか。自分は捕虜として生き永らえている。

種々な作業に従事させられていました。アビサシオンという飛行場に送られました。日本軍が一万三千人いると言っていました。ここでは道路建設、側溝整備、砲爆撃の後片付け、農地整理などの作業が毎日ありました。最後は濠洲兵の監視監督下の作業でした。彼らは鷹揚な上に紳士的で助かりました。

ここラブラン島に来て早半年余りになりました。日本にもそろそろ春風が吹いているだろうな

と、友達と話していました。ある日、沖合遙かに大きな黒船が停泊しました。これが私たちの引揚船です。小舟に乗って本船へ乗り継ぐのです。残務整理で何十人か残りましたが、私は先発で復員することになりました。私の幕舎の者は全員引揚げが同時でした。このような時に、少しでも後に残されたら嫌なものです。申し訳ないような気持で、先発、乗船し、帰国の途に着きました。

昭和二十一年四月十日、北ボルネオ・ラブラン島出帆、海路恙なく、同年同月二十四日に大竹港に上陸し、全身が真っ白くなる程DDTなどで消毒され、復員事務手続が完了しました。そして部隊は解散となり、一路故郷に向かいました。